

次の文章を読み、設問に答えなさい。

土曜の塾は三時から始まる。その前に宿題をすませるためにおばちゃんの家に行くつもりだった。おばちゃんは、あいにく出かける予定があるらしく、宿題につきあってももらえるだけの時間はないみたい。化粧をしているところだった。

鏡台の前にこしかけたおばちゃんは、めずらしく髪をおろしていて、なかなかはなやかだった。

「おお、おばちゃんったら今日はちょっといい感じかも」鏡の横にすわって、おめかしをながめた。

「わたしもそう思っていたよ」

「わあ、言うんじゃないよ。それってうぬぼれ鏡じゃないの」

「鏡はね、真実をうつすのよ」

「はいはい」あたしは横合いから首をのびし、鏡にうつった自分をながめてみた。

この鼻はもう少し高くないものかしら。ころんだときに鼻よりも、うわくちびるに傷がつくのはおかしいもの。だいたいその横のほつたはなんだろう。とがったうわくちびるもそうだけれど、ヒヨコに似ているといわれる一番の原因はこのふくらんだほおにあるんじゃないのかな。

鏡の中にいるヒナのできそこないにあっかんべえをしてやった。

せめてここがもう少しすっきりとしていたら、とほつたをへこませて指でつついた。

りんさんの顔がうかんだ。りんさんにはむだな肉つてものがない。頭蓋骨の上に皮膚をびんとはりつけたみたいな清潔そうな顔をしている。鼻すじは細く、くちびるもすっきりとしている。あたしもやせたらそうなるのかな。

「クラスにすぐやせてる子がいるの」髪をとかしているおばちゃんにきいた。「りんさんっていうんだけど。ほつたもくちびるもすっきりしてんの。やせたらそういうこのお肉もとれるのかな」

「人それぞれよ。灯子はふっくらしたほつたがかわいいんだから、やせようなんて考えないの。やせすぎは不健康よ」

「そういえば朝会でたおれちゃったことがあったな、りんさん。ふつうは、ぐずぐずってすわりこむんだけど、まっすぐ立ったかっこうのままで前にぶったおれちゃうんだもん。見ててあせったよ」

頭は打たなかったのか、とおばちゃんは髪をとかす手をとめた。

「前にいたのがごつい女子だったからだいじょうぶ、広い背中がクッションになったみたい」

「すわっちゃえばよかったのにねえ。かわいそうに。立っていいようにしてぎりぎりまでがんばっちゃったのよ、きつと。がんばりやさんの？ その子って」

「たおれ方でがんばりやとかきめちゃうわけ？ でも、ある意味当たってるかも。ただ、ちょっと方向がちがつちやってる。正しいと思ったらつき進んじやうんだよ。まわりも見ずに」

おばちゃんは鏡ごしにあたしを見つめた。「それって悪いこと？」

① なんだかどぎまぎした。

「あの、ちがうよ。べつに悪いとか言っていない……でも、ふつうはみんなと合わせるじゃない。いくら正しいと思っただけでもないこともあるし、さ」あたしは鏡台にあった口紅をくるとまわして色をながめた。「やっぱり、あんまりマイペースつつうのもどうかなくて」

おばちゃんはあたしの手から口紅をとりあげた。

「りんさんのマイペースに灯子はふりまわされてるってわけ？」

「そんなことない。それほどつきあっていないんだ。クラスと塾がいっしょだからなんとなくいっしょにはいるけど、仲がいいってわけじゃない。だって、からみづらいじゃない、そういう子って」

おばちゃんは手を首のうしろにまわしてネックレスを留めようとした。銀のくさりに涙形のトルコ石がついている。あたしは背中まわってくさをうけとった。

「ねえ、これからだと会うの？」

おばちゃんは髪をかきあげて下を向いていた。そのせいで声がききとりづらかったけれどおじちゃんってきこえた。

「あ、そうか」

おじちゃんが亡くなってからの七年間、ほとんどおばちゃんは月命日のお墓参りを欠かしたことがなかった。

「気合いを入れておしやれするのがお墓参りかあ」ネックレスを留めて髪をおろしてやった。

「いけない？」

「いいんじゃない。おじちゃんとのデートだもん」

肩に手を置いてうしろから鏡をのぞきこんだ。鏡の中にはほほえむおばちゃんがいる。あわいピンクの口紅はや

さしい表情をひきたてている。

「よし。おばちゃん、かんべき」

でもほんとうは、笑顔がちよつと悲しげに見えたんだ。涙の形のトルコ石のせいだろうか。②鏡は真実をうつしだすっていう言葉はあんがい当たっているのかもしれない。

この町は坂が多い。塾にかよいはじめたばかりのころ、この坂で山のような荷を自転車で運んでいるおじさんを見たことがあった。うすよごれた段ボールやくしやくしやの紙袋をつんだ自転車のわきを、一匹の犬が並んで歩いていた。犬はロープにつながれて上目づかいにあたしをながめ、おじさんは前のめりになってよろよろと進んでいた。その自転車に荷物はあきらかに多すぎた。犬はまるで助けてやうてと言っているように思えた。あたしは自転車をうしろからおしてやった。おじさんはふりかえり、すこし困った顔でおじょうちゃんありがと、とそれだけ言った。あたしは何も答えずにだまって下を向いておしつづけた。

塾の前で手をはなすと、おじさんはハンドルをにぎったままで自転車をとめた。そして帽子をとると、ちよつとだけ頭を下げた。犬はしつぽをふつておじさんの横にすわり、塾の中に入るまで、おじさんと犬はそうやってずつとあたしを見送ってくれた。

それから少しのあいだ、あたしのあだ名がホームレスになった。

ホームレスと呼ばれているあいだ、あたしには塾の教室の空気がまるで透明なゴムボールみたいに思えた。パンパンにはりつめていて、はじきだされないようにするのはかなりがまんのいることだった。動きたびにひりひりとするような気がするので、かたをすぼめてじっとしているしかない。

でもそれも長くは続かなかった。フルーツバスケットのゲームみたいに、いすはひとつ足りないけれどずっとすわれないわけじゃない。順番はかわっていくから。順番がどうめぐってくるのかなんてわからない。それは教室のうしろやロッカーのあたりにいる魔物が、長くてきたならしいつめで気まぐれに指差すようなものなんだ。だからみんないつ自分の番がやってくるのか気持ちのどこかでビクビクしているんじゃないかな。

今いすがはずされているのはりんさんで、そのきつかけだつてたいしたことじゃなかった。

あたしたちは塾の帰りに、千夏の家に近いスーパ―に寄るのが習慣になっていた。ある日のこと、りんさんとはつぜんそこにはもう行かないと宣言した。たぶん親の言いつけだったんだと思う。けれど千夏に言わせると「空気が

がぜんぜんよめてない」言い方だったのだそう。

それからだ。学校でもりんさんが理科の(a)ハンに入れなかったり、体育の相手が見つけれなかったりするようになったのは。

でも塾の帰りにとはちゆうまで同じバスにのりし、ふつうに話す。みんなもともだちつていう感じをちゃんとキープしている。何より、りんさん自身はまるで気にしていないふうだ。めがねの向こうから澄んだ目をして堂々と正しいことを言う。言いすぎるくらいに。

塾の一時間目は村田先生の授業だった。先生はいつものように話を脱線させた。こういうときはよくメモがまわってくる。でも、りんさんのところだけは通過することが多い。内容がりんさんにまつわることが多いせいだ。たとえば、「太っちゃったとか言った。ムカつく!」「先生の前ではマジいい子、ウザい」授業中でないときは、携帯のメールがみんなのあいだを駆けめぐる。だから学校のことは塾に持ちこされるし、塾のことは学校のみんなにもすぐつたわる。ともだちを総とつかえでもしないかぎり、どこに行ってもにげ場はない。

塾の帰り、ぼつぼつと小雨が降りはじめた。あたしたちはかばんを頭の上にかざしてバス停まで走っていった。塾からは市内をまわる循環バスで帰る。家までは歩けるきよりなのだけれど、帰りだけはみんなと同じバスを使っていた。あたしのほかに五人の女子が同じバスにのる。③あたしがおりののは家に近い五丁目のバス停ではなく、ひとつ先、きいちちゃんと千夏の家に近い六丁目のバス停だ。六丁目のバス停前には大型スーパ―があつて、そこであたしたちは立ち読みしたり、ジュースをのんだりする。りんさんだけがひとつ手前、五丁目のバス停でひとりでおる。

雨が降りはじめたバスの中は(b)コンサツしていた。大きくバスがゆれると、千夏がりんさんのほうへだれかをおす。おされた人は足をふんばる……拒食症ごっこ。りんさん自身もそのゲームに参加しておもしろがっているようだ。やせていることを自分のウリにするのもひとつの手。ときにはそれでわらいもとれる。それくらいはいくらマイペースな子でも学習する。りんさんが細いうでをのばすと、みんながバリアをつくる。タッチされてもまただれかにタッチしてまわせばセーフ、拒食症の伝染はまぬがれる。

稲妻が窓ガラスの中をキリキリと走った。

あたしは外をながめた。暗くなったガラスにりんさんのすがたがぼやけてうつっていた。窓の中で彼女はまっすぐに立っている。たおれないように両足を広げて。りんさんならぎりぎりまでたおれないだろうな。それでもちこたえられないときは、立った姿勢のままたおれちゃうんだ。きつと、前に向かって。

水滴が、ちいさいへびみたいにガラスの上をジグザグにすべっていく。こちらを見ていたりんさんと窓の中で視線が合った。ほんとうはあたしではなく、ガラスの向こうの何かを見ていただけなのかもしれない。でも、りんさんの目は静かにあたしを透かしていた。すると④あたしの心がちぎんでいく。ソーダ水みたいにシャワシャワとかすかな音をたてて。

かみなりの音がきこえる。

もうすぐ家の近く、りんさんがおりる五丁目のバス停。そのつぎがみんながおりる六丁目のバス停。

りんさんは強いから平気でいられる。どうせ子どもっぽいばかりだ。ゲームだどわりきつっているんだ。そう考えていたときはしゃいだ声がきこえ、千夏の手がうでにふれた。タッチがあたしにきたのだ。

ゲームを続けなきゃ。すぐにだれかにまわさなきゃ。まよっている車内が一瞬、かみなりの閃光につつまれた。つづいてドーンと音がした。

青白い光にさらされた光景はストロボライトをあびたみたいにかびあがり、一瞬、時がとまったように見えた。あわてて外に目をやった。しかしガラス窓は外の景色ではなく、鏡のようにはつきりと車内をうつしだしていた。あたしは目を見ひらいた。

千夏もきいちゃんもほかの人もバスの窓にはうつっていない。りんさんとあたしだけが、ガラスの中の世界にいた。ふたりだけのバスは寒々としていた。エンジンの音も車内のさわがしさも耳から遠ざかった。音のない世界の中で、窓にうつたりんさんは平気な顔などしていなかった。

⑤りんさんは泣いていた。細い手であたしにすがりつき、しきりに何かを言いながらりんさんは泣きじやくつていた。なみだがめがねの下からほおをつたつて落ち、きゃしゃなあごの先にぼたぼたとしずくとなって光っている。しゃくりあげるたびにうすいかたが大きく動く。

そして、あたしはそんなりんさんのうでをふりはらっている。目をつりあげ、口をきつくむすんで、すがりつきりんさんをつきはなしているのだ。

バスのエンジン音もどった。車内のさわがしさがいつべんに耳におし寄せてくる。窓の中にはそのままの車内

がもどっていた。泣いたりんさんも、いじわるなあたしも、ガラス窓の中から消えていた。鏡に思えた窓は、ただのくもったガラスでしかなかった。

「かみなり、ちよう近くなかった？」「まじ、びびったよねえー」みんなはひとしきりさわいだあとに、またもとのゲームにもどった。「灯子の番だよ」千夏がそう言っであたしを見た。あたしがだれかにタッチするのをまっている。

バスの中は息ぐるしかった。⑥もうおりたいと思った。みんながおりるバス停でなく、あたしのほんとうのバス停で。そうしないともう二度とおられないような気がした。たとえ大人になっても、十二才のあたしはこの循環バスに残り、夕闇の町の中を永遠にぐるまわり続けるんじゃないかって気がした。

あたしはタッチされた手をバスの停車ボタンにのばした。

みんなが顔を見合わせる。⑦ボタンは遠くにあつた。手が届かない。まっ暗な宇宙のはてにあるくらい遠くに思えた。

バスはカーブにさしかかり、そこから先の道はふた手に分かれている。ボタンに指がふれた。

思いきつてぐっとおした。赤い星のように停車ランプはかがやいた。

つぎ、とまります。

無機質な声が車内にひびく。⑧カーブのゆれで、つりかわにつかまっていたみんなが安っぽいあやつり人形のようにそろってグラリとよろめいた。

あたしは足をふんばった。前の道をぐつとにらみ、たおれないよう必死で足をふんばった。

りんさんはまっすぐに立っている。そのうしろ、五丁目のバス停のあたりが薄闇の中にうかんで見えた。

小さな声だったけれど、あたしはみんなに向かつて言った。

「あたし、今日はここでおるから」

それからりんさんに顔を向けた。

「りんさん、あの、とちゅうまでいっしょに帰らないかな」

みんなはポカンと口をあけ、りんさんはびっくりしたようにこつちを見つめている。バスはとまった。

⑨あたしはゆっくりとステップをおり、りんさんがあとに続いた。ほかの(c)ジョウキヤクもそのあとにおりてく

る。おりた順のまま、りんさんはあたしのあとを歩く。そして、うしろから傘をさしかけてくれた。でも、傘は重いのかどどん角度を下げていき、あたしの顔にかぶさり、とうとう顔のまん前をかんぜんにふさいでしまった。あたしはふりかえって言った。

「傘、ありがと。でも、前がぜんぜん見えないんですけど」

「うん、わざと」めがねのおく目の目がじっと見つめた。「さっきの仕返し」

「え、さっきって」思わずき返した。「仕返しって？」

りんさんははっとしたような顔をした。それからゆっくりと首をかたむけた。

「なんだろ。なんだか、一瞬そんな気がしたんだけど……わかんない。ごめん」

⑩ ガラス窓の中りんさんもあたしと同じものを見たのだろうか。

「ほんと、どうしちゃったんだろう」と言いながら、りんさんは髪をぼりぼりとかきはじめた。そのひょうしにめがねがずり下がった。⑪ そんな間のぬけたりんさんのすがたを見たのははじめてだった。あたしはふきだしたいのをがまんして、傘の柄をつかむとまっすぐに立てなおしてやった。

⑫ りんさんはあわててめがねを直した。それから照れたように少しわらった。切れ長の目は、わらうとまつげが下向きになるのをはじめて知った。

雨がやんでいるのに気づいたけれど、傘をたたまないでいた。傘の中にやどったもの、やさしくあたたかいものをそのままにしておきたかった。

ふたり並んで傘をさし、雨のあがった町を歩きはじめた。

（語注） ※1 おめかし：おしゃれ

※2 トルコ石：宝石の一つ

※3 月命日：毎月の、その人の死んだ日と同じ日

※4 フルーツバスケットのゲーム：いす取りゲームの一種

※5 無機質：ここでは感情がこもっていないこと

【安東みきえ「環状バス」（『夕暮れのマグノリア』〈講談社〉所収）より】

〔設問〕 解答はすべて、解答らんにおさまるように書きなさい。句読点なども一字分とします。

一 線(a)ハン(75行目)、(b)コンザツ(93行目)、(c)ジョウキヤク(148行目)のカタカナを、漢字で書きなさい。

二 線①「なんだかどぎまぎした」(30行目)とありますが、「どぎまぎした」のはなぜですか。その理由としてふさわしいものを、次の中から一つ選んで、記号で答えなさい。

ア りんさんの行動が本当は正しいことだと思っていたため、おばちゃんに言われて、自分の考えていたことに自信をもったから。

イ りんさんの行動について深く考えないで口にしてしまったため、あらためておばちゃんに問われて、あわててしまったから。

ウ りんさんの行動は悪いことだと思いこんでいたため、おばちゃんに注意されて、自分の今までの行いをはずかしく感じているから。

エ りんさんの行動が良いか悪いかということが問題ではないので、おばちゃんの一方的な言い方に対して軽い反発を覚えているから。

オ りんさんの行動についてはさておき、おばちゃんにりんさんとの関係を誤解されたと思い、何とかそれを解きたいとあせっているから。

三 線②「鏡は真実をうつしだすって……かもしれない」(51～52行目)とありますが、ここでは「おばちゃん」のどのような「真実」がうつしだされていますか。説明しなさい。

四 線③「あたしがおりののは……バス停だ」(89～90行目)とありますが、灯子が「五丁目のバス停」ではなく、「六丁目のバス停」でおりののはなぜですか。説明しなさい。

五 線④「あたしの心がちぢんでいく」(104～105行目)とありますが、それはなぜですか。その説明としてふさわしいものを、次の中から一つ選んで、記号で答えなさい。

ア りんさんの目があたしではなく他のものを見ています。りんさんへの親しみがうすれているから。  
イ りんさんの目があたしの目とあったように思えて、どんな表情をすればいいのか、とまどっているから。  
ウ りんさんの目があたしに対して救いを求めているように感じ、次のバス停でおりるべきか迷っているから。  
エ りんさんの目があたしだけを見ているように思え、周りの仲間に気づかれないう不安になっているから。  
オ りんさんの目があたしの心の中をすべて分かっている気がして、何か後ろめたいものを感じているから。

六 線⑤「りんさんは……泣きじゃくっていた」(118～119行目)とありますが、次の問いに答えなさい。

(1) これまで灯子はりんさんをどのような人物だと考えていましたか。~~~~~線(78～79行目、100～101行目、108行目)を参考にし、三つに分けて答えなさい。

(2) 灯子は、窓ガラスに映ったりんさんから、どのような思いを読み取っていますか。説明しなさい。

七 線⑥「もうおりたい……バス停で」(128～129行目)とありますが、「ほんとうのバス停で」「おりる」とは、灯子にとってどのような意味を持っていますか。説明しなさい。

八 線⑦「ボタンは遠く……遠くに思えた」(132～133行目)とありますが、灯子にとって、バスの停車ボタンが「遠くに思えた」のはなぜですか。説明しなさい。

九 線⑧「カープのゆれで……よろめいた」(138～139行目)とありますが、「安っぽいあやつり人形」というたとえば、「みんな」のどのような様子をあらわしていますか。説明しなさい。

十 線⑨「あたしは……あとに続いた」(148行目)、線⑩「ガラス窓の中に……見たのだろうか」(157行目)とありますが、灯子とりんさんが「同じものを見」、いっしょにバスをおりたことは、二人にとってどのような意味を持つことになりますか。その説明としてふさわしいものを、次の中から一つ選んで、記号で答えなさい。

ア バスの窓に映った自分たちの様子を見ることで、二人は今まで知らなかったがいのすがたに気づき、いっしょにバスをおりることで、心をかよわせあうことができるようになる。

イ バスの窓の中にかびあがる自分たちの様子を見ることで、二人はたがいをますますきらいになるが、いっしょにバスをおりることで、反省して友達になろうとする。

ウ バスの窓の中にかんだ自分たちのみにくいすがたを見たが、それをたがいに許しあった結果、いっしょにバスをおりて、はげましい助けあって、良い友達になろうとする。

エ バスの窓に映った自分たちのいっわりのすがたを見ることで、心の底からあきれてしまったが、いっしょにバスをおりることで、たがいに相手を思いやる心を持つようになる。

オ バスの窓の中にかんだ自分たちのはれやかな様子を見ることで、二人はやはり友達は大切なのだと深く思い、いっしょにバスをおりて、たがいに心をよりそわせようとする。

十一 線⑪「そんな間のぬけた……はじめてだった」(159行目)、線⑫「りんさんは……はじめて知った」(161～162行目)とありますが、次の問いに答えなさい。

(1) ここには、りんさんのどのような様子がえがかれていますか。説明しなさい。

(2) りんさんのこのようなすがたを、この時「はじめて」灯子が「見」、「知」ることができたのはなぜですか。115行目以降をよく読んで、説明しなさい。

十二 この物語において、「鏡」はどのような役割を果たしていますか。物語の内容にふれながら、一六〇字以内で説明しなさい。

〈問題はここで終わりです〉